下さるようお待ちしています。温かい甘酒や年越しそば、そして紅白の鐘もち大福を準備して皆様方のお出でをお待ちしております。

今年1年、長泉寺のホームページをご覧いただきました皆様方に御礼を申し上げます。良いお年をお迎えください。ありがとうございました。

あけましておめでとうございます・・・平成28年1月1日

あけましておめでとうございます。

皆様お揃いで良い春を迎えのこととお慶び申し上げます。本年もなにとぞよろしくお願い申し上げます。

さて今年は平成28年、西暦で二〇一六年、「丙申（ひのえさる）の年」であります。丙申は赤猿とも言い、一名火猿であるとも言い灼熱の魂を持つ猿と言うことだそうです。エネルギーがあまって、馬が走り回り、猿があちこち飛び跳ねるように心の抑えが効かず、煩悩（ぼんのう）・妄念（もうねん）・情欲（じょうよく）等が制し切れない、いわゆる意馬心猿（いばしんえん）の年にならぬよう心引き締め気を引き締めて一年を過ごして行きたいと思っております。

私は馬年生まれですから、尚更この申年にはこの意馬心猿の言葉を自制の言葉として胸にきざみ、隠忍自重の生活をすることにしています。

ところで、猿で思い浮かべる諺（ことわざ）と言いますと、これはもう誰もがそうであるように「猿も木から落ちる」と言う言葉だろうと思います。同様の意味の諺は「弘法も筆の誤り」でしょうか?、ともあれ油断大敵との諺だろうと思います。

この油断大敵でまた思い出されるのは、学校の時教科書で勉強させられた「高名の木登り」というお話だろうと思います。これは『徒然草』の第百九段にでてくる有名なお話で、木登り名人と言われる人が、ある方に指図して木登りをさせ、下から見て、高い所では声をかけなかったけれど、降りてくる途中、軒の高さくらいまで降りてきた時に「油断しちゃいけないぞ」と声を掛けた。つ

まり失敗というのは難しいところにあるのではなく、むしろ簡単で舐めてかかるようなところにこそあるのだと指摘して、それを見ていた吉田兼好はなるほどと感心したというわけです。

これに似たような話で、ある方が仏の教えというのはなんだと聞きましたところ、「諸悪莫作・衆善奉行・自浄其意」と応えた。すなわち、「悪いことをしない良いことをするそして心清らかにする。これこそが仏の教えだ」と。すると、「なんだそんな事は子供だって知っているぞ」と返事をする。それに答えて、「それはそうだ子供の知っていることだと思うけれどもそれを実行するのは大の大人でも難しいぞ」と言われ「なるほど」と言ってそれに返す言葉がなかったと白楽天と鳥窠道林禅師との有名な問答が残されています。

初心にかえり、生き方の基本を守る1年を過ごしたいと思います。倍旧のご指導とご支援をよろしくお願い申しあげ年頭の挨拶といたします。皆様方の幸せ多い一年になりますよう心からお祈り申し上げます。

二本の松・・・平成28年1月28日

おはようございます。

ミネ幼稚園の入り口向かって右側、二宮金次郎の像の前に姿の良い松の木が1本、同じく向かって左側プールの側にも同じような松の木が1本、二本の松が園児を見守ってくれておりましたが残念なことに二本とも松くい虫にやられ、この冬休みを利用して二本の松の木の伐採をしました。

冬休みが終わり正月早々幼稚園に戻ってきた子供たちは「アレなんだか変だな、何か変わったぞ」。そうです、松の木が無くなったことを幼稚園の子ども達も気づきました。保護者の方も気づきました。そこで幼稚園の子どもたちがお正月明けに初めてご本堂にお参りしに来た時、松の木を倒したわけのことを子どもたちにお話しました。「二本の松は、松くい虫の病気になって元気がなくなり、このままだと倒れて幼稚園のおともだちにけがをさせてしまう。病気から助けてあげられずゴメン

ナサイと言って松の木を手でなでてあげました。園長先生は涙が出ました…」と。すると子供たちは、「そうだ、じゃお寺のご本堂から幼稚園に戻る時、お寺の門を出て遠回りをして松の木にさようならを言おう」そうして園児たちも松の木と別れをしました。

さて、天神町から以前の遠藤旅館さんと松川呉服店さん跡の角を西に折れて長泉寺の門までまっすぐ向かう道を昔の人はウグイス横丁と呼んでいました。それはウグイスが梅の枝にとまって鳴くことにかけて、お葬式の時には長泉寺に向かう道を通るわけですから、ご遺族の方々はその悲しみで「泣き泣き」、お墓に「埋め」に来る。それでウグイス横丁としゃれて言ったわけです。

昔、そのウグイス横丁の中ほどに松月堂という美味しい和菓子屋さんがありました。その松月堂さんと長泉寺の山門の間の参道、そこは両側に広々とした田んぼが広がっておりましたので、その参道の両側に松の木をぞろりと長泉寺では植えて飾らせて頂き、そこは特に地元の方々から松原と言われる名所になりました。その松原の道のすぐ脇に大きな石の石碑が建っており、その台座が舟の形をしておりました。（根本培翁之碑）それでその台座を舟石と呼んで、その舟石をベンチ代わりにして、夏の朝といい夕といい、涼みに来る方がたくさんおりましたが、その松原の松は今回幼稚園の二本の松を倒したことで全部なくなってしまい、わたしが子供の頃から慣れ親しんだ風景とお別れをしました。

こうやって自然も変わり、私も歳をとるのだなと、そうお正月は思いました。寂しくなりました。

定物定位・・・平成28年2月24日

おはようございます。

先日、ある人から誘われて「餃子の王将」というお店に入りました。初めて入るお店です。外食する店にあまり入ったことがないものですから、珍しくて店内をきょろきょろと見回していたところ、厨房に「整理整頓」という貼り紙が貼ってありました。その隣に何と読むのか、「定物定位」と書いてありました。

あれはどういう意味なのかな?、皿は皿を置い

てあるところに、丼は丼のあるところに、物は決められたところに後片付けをして、次の人が使いやすいようにしなさいと、そういう意味なのかなと思い、食事をいただいた後に、レジで支払いをする時、店員さんにあの張り紙はどういう意味なのですかと尋ねました。すると店員さんは、何と表現したらいいのかわからなくて困っている顔をしておりましたので、前述したように小皿は小皿があるところに丼は丼のところにという風に決められた所に洗い終わった食器を片付けるのですか?そういう意味ですかと聞きましたら、そうですと応えられました。

私たちの道元禅師がお書きになられました書物の中に、「典座教訓(てんぞきょうくん)」というお示しがございます。これは禅寺で厨房に立つ修行僧の心構えについてわかりやすく道元禅師様がお示し下さった書物です。その中に「高処は高平に、低処は低平に」という言葉があり、同様に、高いところに置くべきものは高いところに、より低いところに置くべきものは低いところに後片付けをして整理整頓をしなさい、いつも使いやすいように片付けておきなさい、そういう意味です。

修行というと、ややもすると私たちは坐禅をしたり何か特別な行をすることであって、そのような行が大事であって、ご飯を作ったりする「仕事」というのは軽んじる傾向にありますが、道元禅師におかれましては、私たちが日常行うこのなんでもないことに上下はないし、また行の高い低い浅い深いもないんだと言う事です。

ご本山あるいは修行僧がたくさんいる禅寺に参りますと、いろいろな日常の仕事の役割を分担してやります。例えば「風呂当番」あるいは「お墓掃除」「ご飯炊き」です。そして、やはりどうしてもお坊さんたちは衣を着てご本堂で活躍をしたいという気持ちがあって、そのような仕事をおろそかにしたい気持ちなるわけですが、みんな一人一役、役に重さの高い低いはないとお示しされたわけです。

「餃子の王将」さんでも整理整頓して器物を置く場所を決めるというところからさらに踏み込んで、「ご飯を作る人」「ご飯を配膳する人」「洗う人」あるいは「レジを打つ人」みんなそれぞれ一人一役みな同じ、その役割に高い低い、重い軽いはないということまで徹底しているのだなと、ちょっと嬉しく思って帰ってまいりました。

別れと出会い・・・平成28年3月11日

おはようございます。最近三つほど嬉しいことがありました。

一つ目、3月1日は宮城県にある県立高校の卒業式が行われた日です。私の母校である角田高等学校でも卒業式が行われました。

その日の夕方、あるお婆さんがお孫さんを連れてお寺を訪ねてこられました。何のご用かなと思っておりましたら、何とそのお孫さんとはミネ幼稚園を卒園したA君だったのです。A君は「園長先生、おかげさまで高等学校を今日卒業して大学に行くことが決まりました」と恥ずかしそうに報告をし、お婆さんが持っていた風呂敷包からお赤飯を出して私に差し出しました。12年ぶりに会う笑顔からは幼稚園の頃のあのあどけない顔は消え、たくましい青年になっていました。「やぁおめでとう!」。その日の夕食は、A君のお赤飯で家族でお祝いをさせていただきました。

二つ目、この度ある家のお爺さまが80歳でお亡くなりになりました。ご葬儀に行きましたら何とそこのお孫さんはこれまたミネ幼稚園の卒園児で、しかもA君と同じく今年角高を卒業したB子さんでした。B子さんも山形にある大学への進学が決まっておりました。

「残念だったね。こんな時にお爺さんが亡くなって寂しいね」と私が声をかけますと、「寂しくて悲しいですが、元気なうちに大学の合格を報告することができたのでほっとしています」と返事をし、その後に次のように言葉を続けました。「私ね、園長先生が晋山式でお寺に入る時、稚児行列に加わって園長先生と一緒に撮った稚児行列の写真とビデオを大事にしてるよ」。こう言われ、私はビックリしました。平成14年、先住職の一周忌法要に併せ行った私の晋山式で稚児行列をしてくれたお友達がもう大学に入る歳になったのだと歳月の流れに驚き、そしてその事をいつも心にかけていてくれたB子さんに感謝をしました。

それから三つ目の嬉しい事がありました。それは今から約20年ほど前、私は保護司という仕事をさせていただいておりましたが、その時出会った女の子に、その女の子のお母さんのお葬式の時に出会いました。「なんだか恥ずかしくて言えなかったけど奥野先生だよねぇ」。そう声をかけられて、？と思ったら何と彼女はなんと私が担当していた女

の子のお友達だったのです。「私たちがぐれていた時は先生に大変お世話になりました」。そう声をかけてくれました。「ん…君達がぐれている時、お母さんはどんな気持ちだったかなぁ」と話をしたら、コトコトコトコトと涙を流しました。「どんなところで出会うかわからないね」と、いろいろお話をさせていただきました。

3月は別れの季節ではありますけれど、新しい出会いのスタートの季節でもあります。みんな、それぞれの道でそれぞれに活躍してほしいと思いました。

今日3月11日は東日本大震災より5年目の日。震災の年に生まれたこども達はもうすぐ「3才児・年少組」を修了し、震災2年前に生まれた子ども達は来る3月15日にミネ幼稚園を巣立つことになります。54回目の卒園式です。

開花・・・平成28年3月30日

おはようございます。

待ちに待った桜が咲きました。3月27日の日曜日、朝、鐘を撞きに行きま

すと鐘楼のすぐそばの桜が開花をしていました。これが今年の長泉寺桜の開花でございました。

早い開花はうれしいけれど、4月8日の花祭り、それから4月10日に予定している幼稚園の入園式の日までこの桜がもつかなぁというのが最初の感想でした。

なぜなら、この時期には「月に叢雲花に風（つきにむらくもはなにかぜ）」という言葉があるように、3日に一度は強い風が吹く季節でもあるからです。桜の花の一枚の花びらも散ることなく、可愛らしい子供たちがまた大勢幼稚園にやってくる、その目出たくも誇らしい入園式をお祝いしてほしいというのが幼稚園の園長をつとめている私の思いでもありました。

桜というとどうしても花見というイメージが強く、花見になりますと賑やかにドンチャン騒ぎ。以前は長泉寺にもいろいろな方がお参りの次いで、夜遅くまでにぎやかに花見をされていた記憶がありますが、最近は方々に花見が出来る公園が整備され、お寺にいらっしゃる方がほとんどおりませ

ん。それはそれで静かなことでありがたいのですけれど、桜景色のお寺の風景を無言で一人で撮りにくる方々ばかりでなく、お友達と仲良く楽しくおしゃべりをしながら桜をご覧になりに来ていただければなと思います。夜のライトアップもいたしますが、とは言え夜遅くまではご勘弁をお願いをいたします。

ところで御法名の中にいろいろな草花あるいは木々の字が入ることがありますが、考えてみますと松とか竹とか梅とか、また菊とか蘭、蓮などの字は多いように感じますけれど、桜と言う字は意外に少ないように感じます。「花の色は濃きも薄きも紅梅」と枕草子にありますように、花ではやはり昔から梅というのがいちばん人気なのでしょう。ＮＨＫの朝ドラマ「あさが来た」でも、主人公の白岡あさが夫の新次郎さんとの結婚40年を記念して庭に植樹したのも桜ではなく梅でした。

ともあれ、桜は咲くのも嬉しいが散るのも美しいと、日本人には独特の美学があって、なかなかややこしいものです。

お城のある風景・・・平成28年4月29日

おはようございます。

「西を仰げば臥牛の城趾、思い出永久（とわ）につきせぬところ・・・」とは、我が母校角田小学校の校歌の出だしです。ありがたいことにミネ幼稚園の園長として私は年に二度、角田小学校様よりお招きをいただき、校歌を歌います。一つは入学式、一つは卒業式です。ですから年に二回この校歌を歌っては小学校時代の楽しい思い出にひたる喜びを味わさせていただいております。

ところが最近、入学式ではこの校歌を歌わなくなりました。代わりに角田市民歌を歌うようになり、この市民歌の中にはお城を称える言葉がなくなりました。

角田城趾は小高い丘の上にあり、寝そべっている牛の姿に似ていることから、臥牛城跡と言われていますが、角田にはいわゆる天守閣を有するお城はなく、いわゆる舘（要害）であります。

子供の頃から「いいかお前ら、宮城県というのは仙台県と角田県の二つが一つになったのだ。なぜそうなったかというと、私たちの郷土角田は仙

台藩伊達一門筆頭の石川公のお膝元なのだ。そういうところにお前らは生まれ育った。ここで一生懸命勉強して角田城趾のところに、あの丘の上に建っている角田高校で学んで故郷に錦を飾れ。」そう言われて、角田に生まれ育ったことを矜持として、あぁ、自分は立派ないいところに生まれたんだな、と言う誇りを植えつけられて育てられたのでした。

角田高等学校の校歌は「臥牛舘内名に高き豊成閣のいしずゑを・・・」をというものでしたが、この校歌も先年、角田高等学校と角田女子高等学校が合併したことにより今は聞かれなくなってしまいました。寂しいことです。

お城のある町で育った者にとっては、お城に対する特別の想いがあるのではないでしょうか?とりわけ、正岡子規ほど生まれ育った郷里のお城、すなわち松山城を大切にした人はいないと思います。『松山や 秋より高き 天主閣』この歌を正岡子規はお城の写っている写真の裏側に書き留め、死ぬまで終生肌身離さず身にしていたということです。この正岡子規に秋山好古、秋山真之を加え、三人を主人公として司馬遼太郎は小説「坂の上の雲」を書きましたが、その書き出しも松山城から始まっています。

さて、4月14日、4月16日と九州で大きな地震があり、特に熊本では甚大な被害にあわれております。テレビの映像で地震のため熊本城が噴煙を上げて屋根瓦が落ち、城の石垣が崩れるところが何度も放映されました。城下町に育ったものとしてはお城というのは自分のアイデンティティーでもあります。あの映像を見るたびに熊本の方々は精神的にも非常な困難な状況の中で今ご苦労されていることが伝わってきます。被害に遭われた熊本の人々の窮状を、熊本城がまるで切々と訴えているようです。

心からお見舞い申し上げますとともに長く続く余震が収まり、一日も早い復興が成ることを願うばかりです。舘とは言え、お城のある町で生まれ育ったものとして角田の皆様方のお力をお借りして熊本の方々の一助となるべく托鉢をします。ご協力をお願いします。

かえるのうた・・・平成28年6月16日

6月の雨の日の幼稚園は静かです。暑い夏の雨降りならば勇ましい園児たちは裸ん坊で泥遊び、砂遊びに歓声をあげ、笑い興じるのですが、梅雨寒むの天気にはさすがに飛び出してくる子はいません。どうやら、お部屋の中で歌を唄ったり、お絵かきしたり、ゲームをしたりして遊んでいるにちがいない。

6月の「こじか」（ミネ幼稚園の園便りのこと）を見ると、今月の歌は「かえるのうた」と「かたつむり」だ。幼稚園や家庭のみならず、どんな人とも一緒にうたえる歌を、と言う幼稚園の先生方のはからいらしい。毎月のお誕生会には誕生児の保護者（殆どがお母さんですが）の方もお祝いに来園され、その月の歌を全員で唄うのですが、それはそれは皆幸せそうな笑顔となり、幼稚園全体が嬉しい一日となります。

ところで、さきごろ北海道で「しつけ」と称して、小学二年生の男児を山中に放置するという事案が発生しました。放置した時間はわずか5分間程のようでしたが、男児が無事発見されるまでには6日間の日数を要する世界的な大事件になってしまいました。

その事の顛末を報じるニュースを観ながら思ったことは、ふだん家族といっしょにどんな歌を唄っているかでした。嬉しい時はもちろん、辛い時悲しい時に人は歌を口ずさむものです。この少年は6日間どんな思いでいたのでしょう?。叫んだり歌を唄ったりしなかったのでしょうか?。

私など一週間も知らない山中に、しかも何の食料もなく放置されたら泰然自若（たいぜんじじゃく）として少しも騒がず、ゆったりと坐禅を組むなどと言うことは到底出来るものではありません。おっと、話が脱線しました。

さて、幼稚園のお誕生会では「ハッピー・バースデー・トゥ・ユー」の歌を何の不思議もなく唄うわけですが、考えてみれば、「ハッピー・バースデー・トゥ・ユー」に代わる日本の歌、日本に於ける誕生日を祝う歌が無いというのも不思議なことです。ご先祖様に感謝する「お盆」や「お彼岸」の行事は毎年あっても、誕生日を祝う習慣はなかったのでしょうか?。

施設に入居している老母も89歳になりました。誕生日の歌を唄いながら、あと何回ハッピー・バースデーの歌を唄えるかと思うと、ふと諸行無常の言葉が浮かび、目頭を拭ってしまいます。

竹の子にも親切な良寛さん・・・平成28年6月30日

おはようございます。

曹洞宗報付録「てらスクール」6月号に『竹の子にも親切な良寛さん』という面白い話が載っていました。今日はそのお話をします。あらすじは以下のようです。

良寛さんは、五合庵と言う藁屋根の小さなお家で住んでいました。ある夏の日、その良寛さんの庵に、タケノコが生えてきました。良寛さんが見ているとタケノコはすくすくと大きくなり、やがて屋根につかえるまでに背が高く伸びてきました。このままではタケノコが屋根につかえて困ってしまうだろう。かわいそうに思った良寛さんは、藁屋根に穴を開けてタケノコを屋根の上まで伸ばしてあげようと考えました。

そこで良寛さんは、ろうそくの火で穴を開けてやろうと藁屋根にろうそくの火を近づけました。すると大失敗、藁屋根が燃えて家が火事になってしまいました。優しい良寛さんは、ついタケノコのことばかり思って火事になることを忘れてしまったのですね、と言うお話です。

ところが、この話を幼稚園の五歳児のお友達に話したところ、私たち大人が想像もしない反応を示しました。それは、園長先生！タケノコはどうなったの？やけどしたの？やけて死んでしまったの？…．などなど、家のことではなくタケノコのことを皆な心配したのでした。

そこで私たち大人は、はっと驚きます。そうだ良寛さんはタケノコを大切に思い、タケノコのために藁屋根に穴を開けようと思って火をつけてしまったのだ。いつの間にか私たちは焼けたお家のことばかりに気をとられ、タケノコの命のことを忘れてしまっていた、その事にあらためて気がつきます。

小さな子供たちは、家というものより命のあるタケノコの方を大切にする眼を持っていました。ところが、私たちは小さな子供やお年寄り、そのような幼老弱者の命を大切にしようとするあまり、頑丈な屋根や天井を設けて穏やかな環境の中で育てようと考えています。するとやがて、環境整備に力点が移り、保育や介護のためには、より良い適切な環境を整えれば整えるほどより良い保育や介護が出来るにちがいないと勘違いしてしまうの

です。
本当に大切なのは、より良い育ちを援助する良寛さんのようなあたたかい「同事行」の心なのにね…。
さて、住む家が火事になってしまった良寛さん。屋根が無くなり、これでタケノコは存分に背が伸びると嬉しく思ったでしょうか？それとも、タケノコを助けようとして家が焼けて残念だ。失敗したと思ったでしょうか？。
今日はこのお話で終わりといたします。ありがとうございました。

お盆を前に・・・平成28年7月27日

昭和47年私は大学に入学し、その年の7月、父親を師匠として法戦式（ほっせんしき）をあげました。法戦式というのは、お坊さんとして独り立ちする目出度い儀式の一つでもあります。
ところが、まさにその日、大学の医学部6年生になる従兄弟が、江ノ島でクラブ員たちとヨット遊びをしているうちにおぼれて亡くなったという訃報が届きました。お祝いの気持ちで盛り上がっていたお寺の空気が一気に沈み、母親はあわてて実家に帰りました。母親の実家の伯母は、その長男の葬儀が終わるころから悲しみのあまり体調を崩し、数年後には大学病院へ入院をするようになりました。
そして私が学部を卒業し大学院に進学する頃、いよいよ病状は悪化しました。伯母の命はあまり長くないと母親が父親と話している声を聞いたことがあります。ある時、私は伯母にお見舞いに行きました。当時の大学病院の病室は木造で入院患者たちが使う炊事場もありました。10円を入れると何分かガスが使えるガス台もありました。伯母は大学院へ進学はどうなったか？と心配しながらその炊事場でカレーを作っておりました。あなたが来るというので作っていた。と話をしてくれました。病気を見舞う側の私があべこべに心配されているとは話しが間違っていると感じその優しさにカレーは喉を通らず味もせず、いまではただその時の光景だけが思い出されます。
やがて私は大学院に入学し、入学と同時に伯母

は他界しました。伯母が他界した日、なぜか私は角田におり、おばさんが亡くなったから早く亘理の家に行って手伝いをしろと父に言われ急ぎ伯母の家に行き、親戚のおじさんたちと部屋を片付け帰りを待ちました。

しかし、帰ってくるまでは時間があるからといって何か口にすることになりました。大切な伯母を失い、悲しくても腹がへればご飯を口にするようになるとは、何と情けないことだろうと涙がポロポロ出ました。

さて修士論文を提出する日の朝がきました。白石駅から特急ひばりに乗り東京に向かいました。ところが夜、自宅に帰ってみると家にたくさんの車が集まり、電気が煌々としています。何かあったのか?と思って入りましたら私の祖母が亡くなっていました。

祖母は病床にあって臥せってはいましたが元気でした。朝、桜餅を食べみんなでお茶を飲んだ後、病状が急変し絶命したのだと聞かされました。息をひきとる時間の頃はまだ特急が上野に着いていない時間です。私が出かけて間もない時刻です。あまりのあっけなさに死んだという事実をどうしても受け入れることが出来ず、ただただぼう然としました。諸行無常とは言え、人の死とはこういうものでしょうか?病気で寝ていて会話することも多くありませんでしたが、私の部屋の隣室からいつも励ましてくれていた祖母でした。

父親が遷化したのは平成14年5月13日でした。方丈さんの葬儀だ、とんだことになったと長泉寺は大騒ぎになりました。

多くのお弟子の僧侶の方々、教区のご寺院の方々、関係する僧侶の方々、護持会役員の方々、幼稚園の保護者、檀信徒の方々、その他大勢の方々のご協力を得て大本山総持寺の板橋興宗大禅師猊下を秉炬師（ひんこし）にお願い申し上げ四十九日目に本葬させて頂き、8月20日が百か日でした。

この辺で言う二十日盆の日に百か日を迎えました。父親が亡くなった後バタバタと過ごし、忙しさでいままで悲しみの境地に立てなかった私でしたが、その日の夕方西日の当たる父親の部屋で初めて声を出して泣きました。

毎年お盆が近くなるとなんとなく決まって亡くなった家族の事を思い出すものです。失礼を致しました。

お盆が過ぎて・・・平成28年8月19日

おはようございます。

今年のお盆もあっという間に過ぎ去ってしまいました。お盆が終わったら台風７号が北上して、何かお盆の余韻もなく過ぎ去ってしまったような感じがいたします。。

さて、皆様はお帰りになられた仏様とどのようなお話をされたでしょうか?.オリンピックに気をとられ、仏様と話もしないうちにお盆が過ぎ去ってしまったなどという方もいるのではないでしょうか。

私もお盆の前にこのホームページに記述させて頂きましたが、自分と仏様との心の交流は他人にお話してもなかなか伝わりません。けれどそれは、それぞれ個人の心の問題ですから、それはそれで良いのだと思います。

お盆中、お寺にはあんなにたくさんのお参りの方々が来ていたのに、今では人影がまばらです。そのかわり「ポケモンGO」の若い男女達が訪れてきています。そこで私は彼らにたずねてみます。「長泉寺に来てポケモンをゲットできましたか?」「いえ。仙南にはそうたくさんのポケモンポイントがないんですよ」「それでもここ長泉寺はある方ですよ」と言う声が聞かれます。

私はそのゲームの楽しみもルールも解らないものですから、一体それがどんなに楽しいのか理解出来ないのがすごく口惜しいです。このゲームがダウンロード開始と同時に、神仏に会いに来るのではなくポケモンに会いに来るために若い人たちが全国各地のお寺や神社に集うという社会現象を引き起こし、神社仏閣を賑やかにしていると言う皮肉な結果となりました。

ですからご本堂に手を合わせるのはお参りに来るお年寄りの方々やそれぞれの御信心のある方々、若者はただお寺という景色の中でゲームをするという不思議な二重構造のお寺になって来てしまいました。このポケモンと遊んでいる人たちがやがて将来どんなお盆をお迎えするのか、私も長生きをして未来のお盆の姿を見たいと思います。

ともあれ、角田では台風が無事に通り過ぎて、大事に育てた農作物への影響も少なく、このまますすめば今年も良い稔りが期待出来そうです。秋のお彼岸もご先祖様に感謝して、生きていま命あることに感謝したいと思います。

仲秋の名月・・・平成28年9月14日

9月15日は仲秋の名月です。それにちなみ、名月を愛でる「寒山拾得」の掛け軸をかけました。この絵は、丸森町出身の斎藤弓弦先生の作、地元でも有名な画家の一人です。この作品は、東京におられた頃の作と思われ、丸森に帰ってきてからは画風が変わり、専門家からの評価が下がったと言われていますが、私にはそのへんのところはよくわかりません。ともあれ非常に穏やかな「寒山拾得」の絵で、私の好きな作品の一つです。※1。

さて、今年の夏は非常に暑い夏で毎日辟易していましたが、何か夏に1冊ぐらいは本を読みたいと思い手に取ったのが頼住光子先生の「正法眼蔵入門」という本です。角川ソフィア文庫の中に入っています。

この本の中で私が一番感動したのは何かと言いますと、二三〇ページから書かれてある文庫本のあとがきで、（それぞれに長い時間をかけて道元の文章と悪戦苦闘してきたことをうかがわせる学生たちのゼミの発表を聞きながら、道元の文章が実にさまざまな読みの可能性を含んでいることを改めて思い知らされた。私とは違う読み筋ながら、学生たちの読みはそれぞれに説得的で、道元の文章は、多様な読みを許容する、それどころか、多様な読みを触発することを目指して書かれたのかもしれないとさえ思った。学生たちの多様な道元の読みに接して、ふと私の頭をよぎったのは、「それぞれの読み筋は、その人の運命なのではないか」ということであった。本文でも書いたように、道元の文章は、私たちが潜在的に持っている認識の前提を切り崩してくる。そのような前提を取り払った時に見えてくるのは、その人をその人たらしめる核心、原質というべきものではないだろうか。仏教が説く「空」や「無我」によって、人は空っぽの抽象、スタティックな理想の境地を得るのではないだろう。「空」や「無我」という考え方は、人が世俗を生きる中で不可避的に身に着けてしまった思い込みや執着から人を解放する。常識という名の思い込みや執着に揺さぶりをかけてくる道元

の文章を読むことで、人は自己の原質、つまり自己の運命に向き合うのだろう。その意味で、本書は、道元によって触発された私の運命の一端に触れたものと言っていいのかもしれない。）

ここを読んで私がぐっと感ずることがありました。「それぞれの読み筋は、その人の運命ではないか」と言う一文を読んでハッとして呻ってしまいました。世間では縁を見つけるか見つけないか、縁とするか縁としないかはその人の実力であり、力量であるというような言い方をする方もいますが、頼住先生は読み方がいろいろなのはその人の力量によると言わないでその人の運命であると、こう言われたところにおっと感じたわけです。

当然ながら、正法眼蔵とは道元禅師がご自身のお悟りの体験を書かれたものです。私たちは、私たちが体験したことを拠り所として道元禅師のお悟りの跡を読ませていただいているわけです。そこで、私たち一人一人が正法眼蔵を読むということを自己の修行とし、道元禅師の修行の跡をなぞろうとするわけです。日常、私たちは悟りの世界に入ったり出たりして生きている。その生きている環境の中で正法眼蔵を拝読するというのはまさにそれぞれの運命です。そのところを頼住先生に突かれて私は感動いたしました。

さて、僧侶の中には、最終的には道元禅師の書かれた著述は坐禅をした者にしか分からないことだ、坐禅をしない人は頭だけで理解しているにすぎないというようなことを言われる方もいます。

8月の末に縁があり、図らずも頼住先生は遥か東京大学からこの角田の長泉寺にお越しいただき、3時間ほどご講義を頂く縁をいただきましたが、坐禅をしなければわからないというお坊さん方もその中にはいたように思えます。しかし坐禅をしなければ解らないというようなお坊さんは意外に坐禅もしてないお坊さんだとも感じました。

ともあれこの夏、暑い中にこの僅か二百数十頁の本ではありましたけれども拝読させて頂いたというのは貴重な夏を過ごさせていただいたなと感じております。正法眼蔵から生き方を学び、寒山拾得の境地で名月を愛でたいと願うばかりです。

秋、涼しくなりましたお体ご自愛下さい。

※1…日本画家。宮城県（丸森町）生。本名は亀治。別号に灑山。小堀鞆音に師事し、土佐派を

研究、数々の審査会で入選し、作品は東宮職・皇后職御用品ともなる。大正3年第8回文展で初入選し、その後も文展・帝展で活躍のかたわら、教科書の挿画も手がけた。戦後は地元に帰り、創作に励んだ。昭和49年（1974）歿、93才。

年の瀬に・・・平成28年12月14日

今年一年、長泉寺のホームページをお読みいただいた方々に心より御礼申し上げます。

「日々の出来事について感じたことをもっと気軽に書かれたらいかがですか」と応援して下さる読者の方もおいでですが、私の性格上そういう訳にもいかず、書いては掲載する時宜を失ってしまい紙屑かごにポイした原稿は数知れません。加齢とともに遅筆になった事は否めない事実です。

一度文章を書いたら推敲を重ね何度も文章を練り直す。というのが、私が小学生の頃から教わった作文の書き方だったように思えます。

私もお盆の前にこのホームページに記述させて頂きましたが、自分と仏様との心の交流は他人にお話してもなかなか伝わりません。けれどそれは、それぞれ個人の心の問題ですから、それはそれで良いのだと思います。

ところが、最近の若者はとにかく感情の赴くまま、すらすらぺらぺらと書き驚くばかりです。うらやましくも思えます。

風邪をひき、3週間もぐずぐずした生活をしてご迷惑をお掛けしておりますが、年末年始の行事は例年通りですので、どうぞお参りにお越し下さい。

お待ちしています。

年の始めに・・・平成29年1月1日

あけましておめでとうございます。

今年もよろしくおねがいします。ご家族皆様方のご健康とご活躍を心からお祈り申し上げます。各人、みんなと仲良く楽しく、幸せに過ごせる一年になりたいものです。